

子宮頸癌遠隔転移の中で肺転移は剖検上, 1~2位を占める高い頻度を示すにも拘らず, 臨床的発見の報告は極めて少く, その頻度も低い。之は臨床的には比較的早期症例を扱う爲に, その症状が少ないのと, その予後の不良さから来る関心の薄さと調査の不十分が大きく関係するとも思える。その転移の機構からも細心の観察によつては, その頻度は寧ろ高まるものとも思える。私共の教室で昭和22年4月より35年11月迄, 子宮頸癌入院治療数856例中8例(0.93%)に肺転移を臨床的に発見したが, 34年末迄は766例中4例(0.52%)に対して, 35年度は定期的レ線検診により90例中4例(3.14%)の発見を見た。教室自験8例の進行期はⅢ期5例, Ⅳ期3例で, 治療別には岡林術式2例, 放射線6例で, 肺転移発見時期は治療開始後1カ月より3年3カ月に涉り, 発症による発見2例, 胸レ線検診で6例となる。症状は肺病変の差異に基き, その現れ方も理学的所見と共に種々であるが, 早晚喀痰乃至血痰, 咳嗽, 喘鳴, 胸背痛等を訴える。胸部レ線上の病巣の現れ方は結節型多発3例, 単発2例, 浸潤型3例である。転帰は現在加療中の2例を除く6例中5例は, いずれも胸レ線にも増悪の徴を示しつつ発見後1カ月より1年以内に衰弱死を遂げたが, 結節性単発陰影を示した1例でナイトロミン投與を行つた者は, レ線上増悪の徴なく2年1カ月後死亡した。

以上, 私共の教室で臨床上経験した肺転移例について述べ, いささかの考按を加えたい。

129. 産婦人科領域に於ける 転移性肺腫瘍のレ線学的研究

(盛岡日赤) 菊池俊雄, 細川国次郎

白間 勇, 三善 悟

轉移性肺腫瘍の示す多岐に互るレ線像の様相を明らかにすると共に肺轉移早期レ線像の検討を試みた。

悪性腫瘍 506例(昭和20~34年)中確認された肺轉移症例34を Banjai, 梅垣の分類法に従い整理し, 原発腫瘍別のレ線像の特徴と疑わしい異常陰影の経過追求によつて早期レ線像を検討し凡そ次の成果を得た。

1) 肺轉移巢の示すレ線像は腫瘍型且つ多発型が多い。一般に小結節状陰影分布密度は中, 下肺野に密で, 肺尖部, 上肺野は粗で, 下肺野に向う程陰影の徑を増大する傾向がある。

2) 原発腫瘍臓器別に肺轉移巢の様相を検討すると

i) 子宮癌, 卵巣癌: 腫瘍型と淋巴管炎型相半し, 腫瘍型は結節状陰影の邊緣比較的鮮鋭平滑で円形巢に近い単発性から不整形に近い播種性のもの迄雑多である。

ii) 悪性絨毛上皮腫: 定型さをもつ症例が多い。大多数が腫瘍型で, 鮮鋭な円形巢を示すが中には不整形, 邊緣多少不鮮明な浸潤型をみ, 病巣無構造, 大きさ10mm前後のものが多い。

iii) 肉腫: 腫瘍型のみで円形, 類円形, 邊緣鮮鋭, 平滑無構造の判然とした所見を呈する。

3) 肺轉移早期所見は必しも定型さなく, 轉移を考慮して胸部レ線像を追求すれば早期所見を捕え得る可能性がある。即ち小円形巢や限局性及び全般的肺紋理増強の出現は轉移機轉の初発を意味し, 看視精査の要がある。

4) 断層撮影像, 高圧撮影像の肺轉移巢特に結節像の証明, 診断上の意義及びレ線的識別の限界に就いて考察した。

第19群 悪性腫瘍に関する問題 III (絨毛上皮腫, 卵巣癌)

130. 胞状奇胎・絨毛上皮腫の 孵化鶏卵移植に関する知見

(慶大) 野嶽幸雄, 針ヶ谷成夫, 田村昭蔵

動物・人体由来の正常及び腫瘍材料を孵化鶏卵漿尿膜(以下CAMと略)に移植し, 奇胎, 絨腫では毎常CAM上に明確な腫瘍を形成し, 組織学的には移植片は結合組織層内で壊死脱落するが, これとは別に限局性に上皮, 結合組織の旺盛な異型的増殖像を伴うことを認めた。正常胎盤, 各種ホルモン製剤ではこの様な所見は得られなかった。更に奇胎23症例, 絨腫3症例の材料につき, Seitz, Coli 5 membrane filter 濾過, Spinco L 高速

遠心, 稀釋, 繼代等の実験を進め以下の知見を得た。供試全例につき, 長期凍結保存材料, 各種濾過液, 超遠心分畫液等のいずれもCAM上に明確な腫瘍を形成した。腫瘍発生の頻度は濾過, 超遠心, 稀釋等の操作による材料の純化に伴つて上昇し, 且つ散在多発の傾向を示した。稀釋実験はSeitz 濾過液10~1倍まで行つたが腫瘍は高率に発生した。卵膜腫瘍の3代に亘る繼代を絨腫材料超遠心20,000~40,000分畫で行い, 全実験を通じ最高の腫瘍発生率60%に達した。腫瘍の組織学的所見は奇胎, 絨腫由来ともに近似し, 文献による卵膜の非特異的变化, 炎症性Virusによる病変と比較し明かに腫瘍